



貞山運河特集を手掛けたライターの佐々木さん（左）と菅井さん

貞山運河の歴史と今

「りらく」1月号で特集

県中部の海岸線に沿って南北に流れる「貞山運河」の歴史と、東日本大震災からの復興を目指す現状を知ってもらおうと、プランニング・オフィス社（仙台市）が発行する月刊誌「りらく」1月号が2021年にわたって特集している。

貞山運河は仙台藩伊達政宗が城下町の建設に取り組んだ江戸初期から、明治半ばにかけて約270年がかりで築かれた運河群の総称。政宗の法号にちなみ、明治になって命名された。南の阿武隈川河口から北の塩釜港まで「木曳堀」「新堀」「御舟入堀」と連なる約31・5キロと、松島湾を挟んで北側の東名運河と北上運河を合わせると総延長は40キロをゆうに超え、日本最長を誇る。

運河全体の開削と活用は歴史を分かりやすくまとめた仙台市のライターで児童文学作家の佐々木ひとみさん（58）は「約400年間、生活文化の中に脈々と息づいている。後世に伝えるべき貴重な土木遺産」と強調する。

運河は震災の津波で堤防と生態系が破壊され、この10年でさまざまな形で復興が図られてきた。高いコンクリートの壁がそり立つ名取市内の木曳堀。原生的な自然の風景を残す仙台市若林区井土の新堀。塩釜市の御舟入堀は船の停泊所としても親しまれている。

地域ごとの現在の表情と沿岸の人々を取材したライターの菅井理恵さん（42）は「運河に関わってきた誰もが、再び釣りや舟遊びをしたいと願っている。運河を楽しむことを入り口にして新たな歴史が始まりそう」と期待する。

充実した記事とともに、写真家の穴戸清孝さんによるページいっぱいのカラー写真も目を引く。貞山運河周辺にある震災伝承施設、ラーメンやカレーなどの飲食店情報も盛り込んだ。

「りらく」1月号はA4判オールカラー、116頁、550円。